

目とも、又云聖目と此字を用事極僻事也、際目とは此字を用と云々、さかひま目と云なり、さかの兩字を略して聖目と云習へるなり、

〔因云碁話六〕聖目の事

按するに、略局面九ツ黒星を勢子の座とす、勢子の置き様圖を見て知るべし、子は種なり、碁子のことなり、碁をうつ種なるゆえ名とす、勢子を定むる事、日本にもいにしへありしことやまらず、兼好が徒然草には聖目と書り、また俗に九ツの黒星を井目といふけらし、予幼年の時、貴家の奥方にて、老女の圍碁を好むものこれありしが、其の言には勢子目といひぬかくのごとく傳へしところもありしと見えたり、勢子の座、正字なれども、九曜によれば星目も義あり、井田の形によれば、井目も理なきにあらず、聖目ひぢりめは、實に僻字成べし、

〔東大寺獻物帳〕木畫紫檀碁局一具、内藏花形眼、牙床脚、局兩邊著環、局

〔東大寺正倉院寶物圖〕碁盤略、碁一尺六寸三分、四方、石筍、龜形、石各悉有、花鳥繪

〔倭訓栞後編十〕せいもく略、中南都正倉院所藏の盤に、一は常の聖目に四ツ多くて、中の四ツ

なり、一は五ツならびにて、五々二十五點あり、其點櫻花に繪けり、

〔東大寺續要錄寶藏〕勅封藏開檢目錄、北藏略、中朱漆韓櫃廿六合略、中一合納略、中紫檀圍碁

枰一枚略、中中藏略、中一合納略、中圍碁枰一枚、楮辛櫃五十八合略、中一合納略、中切目圍

碁枰一脚略、中一合納略、中圍碁枰一脚在錦覆蓋、建久四年八月廿五日

〔本朝世紀〕康治元年五月五日丁酉、是日法皇羽鳥并入道大相國忠實、於東大寺登壇受戒、六日

戊戌、早且開勅封倉御覽寶物略、中寶物之中、聖武天皇玉冠及鞍御被枕碁局略、下

〔橋庵漫筆五〕碁盤の足の山、梶子形なるは、助言をいましむる所以なりとはかねて聞ぬ、瑯琊代醉に、盤の裏面の切子形は血溜にて、助言せし者の首を切てすゆる處なりといへり、